

落窪物語 堤申納言物語



日本古典文學大系

日本古典文學大系 8

古今和歌集

佐伯梅友校注

岩波書店刊行

昭和 33 年 3 月 5 日 第 1 刷 発行 ©
昭和 51 年 5 月 25 日 第 19 刷 発行

定価 1800 円



校注者

佐伯 梅友

発行者

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布 1-385
白井倉之助

発行所

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

解 說	三
凡 例	六七
假名序	九三
卷第一 春歌上	一〇五
卷第二 春歌下	一二七
卷第三 夏歌	一三九
卷第四 秋歌上	一六一
卷第五 秋歌下	一五一
卷第六 冬歌	一六三
卷第七 賀歌	一六九
卷第八 離別歌	一七四
卷第九 羈旅歌	一八四

卷第十	物名	一九〇
卷第十一	恋歌一	二〇〇
卷第十二	恋歌二	二二三
卷第十三	恋歌三	二三四
卷第十四	恋歌四	二三六
卷第十五	恋歌五	二五〇
卷第十六	哀傷歌	二六五
卷第十七	雜歌上	二七五
卷第十八	雜歌下	二九一
卷第十九	雜體	三〇六
卷第二十	大歌所御歌	三三四
真名序		三三四
校	異	三四五
作者索引		三五二

解 説

山岳重疊の大和から、山河襟帯の山城に遷都されて、地理的環境がかわれば、そこに築かれる文化の性格がちがってくるのは当然であり、大和を背景とする万葉集と、山城を背景とする古今集・新古今集とが、その歌風・歌調を異にするのは、あたりまえである。平安遷都は、旧都にまつわる因襲から離れて、清新な政治を行おうとする政治的事情によって企てられたこと万々であるが、よく考えてみると、この政治的事情の裏にあったものは、民族の成長ということであって、古い小さい衣を捨てて、新しい大きい衣を求め、新しい大きい衣にすでに成熟した肉体を包もうとする内部要求が、遷都をうながす一因であったと見られる。されば万葉集と古今・新古今との相違は、単なる地理的環境による相違ではなく、民族の成長による相違であり、発展であったのである。

古今集は源氏物語に流れこみ、新古今集は源氏物語から流れ出ているから、同じ水といえば同じ水、源氏物語を濾過したものは、すでにもとの水でないといえれば別の水である。たとえ新古今集の方が芸術的にすぐれていても、平安文化の一変形である中世文化は、もとの心を忘れず、古今集を経典として歌風を展開させたのである。近世になっても古今集を尊重する思想はつづき、小沢蘆庵や香川景樹は典型的な古今派歌人である。

明治になって、正岡子規は古今集を理窟の歌であってつまらないとし、今もその思想が普及して定説のようになっていく。これはおかしなことである。我々はあくまで民族の成長という点から古今集の意義を考察すべきであり、素朴な

万葉集から優雅な古今集に発展し、さらに幽玄・有心を旨とする新古今集に発展した成長に興味をよせ、成長の各段階における個性・特色に愛着を感じずべきである。古今集千百余首、理窟の歌ばかりではない。優にやさしい歌、情こまやかな歌、おおらかな歌、詞のあやのおもしろい歌など、さまざまであるのを、よく見分けたいものである。

一 名称と名義

古今集の正しい名称は古今和歌集で、万葉集では用いられなかった「和歌」の二字がつけられた。和の字は倭とも書き、歌の字は哥とも詠とも書いている。古今集は略称であるが、更に略して古今とだけもいう。「古今」の二字はコキと読むのが普通であるが、ココンと読む説もある。古今集が編修の初期において、「続万葉集」と称せられたということについては、成立の項で触れる。

古今和歌集という題号の意義はいろいろ考えられるが、これを次の四つにまとめることができる。

- (1) いにしえいまの歌集
- (2) 古今の変遷の中から、正しい風雅の道を立てようとする目的をもってえらばれた歌集
- (3) 古今不易の歌集
- (4) 今えらんだ歌集が、やがて後世から古典として仰がれるという信念をもってえらんだ歌集

この四つの意味は別々ばらばらのものではなく、いずれも連関性をもつのであるから、初重の解釈（基本的な解釈）としては「いにしえいまの歌集」でよく、それを二重・三重（深い解釈）に考える場合は、その他の意味がその中に含まれているという考え方でよからう。

二成 立

貫之集卷十に、

延喜の御時、やまと歌しれる人々、今昔の歌たてまつらしめ給て、承香殿のひんがしなる所にてえらばしめ給ふ。始の日、夜ふくるまで、とかくいふ間に、御前の桜の木に時鳥のなくを、四月の六日の夜なれば、めづらしがらせ給うて、召し出し給て、よませ給ふに奉る

こと夏はいかが聞きけん時鳥こよひばかりはあらじとぞ思ふ

とあるのは、古今集の撰修の時のことと見られ、四月六日とあるのは十八の二字を六の一字に誤ったという、藤原清輔の袋草紙の説に従って、延喜五年（九〇五）四月十八日の夜、歌集の勅撰という史上初めての盛事に緊張した貫之の気持ちを伝えるものと見たい。承香殿は仁寿殿の北にあって、清涼殿からほど遠くもない。「始の日、夜ふくるまで、とかくいふ」というのは、採集・選択・編修などの方針について議したものと見られ、実際に作品の採用・選択をするというまでには至っていなかったと見たい。たまたま、その夜、ほととぎすが鳴いたのであるが、貫之の召し出されたのは、清涼殿であろう。かくして延喜五年四月十八日は勅の下された日、すなわち、撰者からいうと記念すべき奉勅の日なのである。両序にもこの日付があつて、四月十五日という本もあるが、四月十八日の方が正しいとおく。

仮名序に「延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書の所のあづかり紀貫之、さきの甲斐のさう官凡河内躬恒、右衛門の府生壬生忠岑らにおほせられて、万えふしふにいらぬ古き歌身づからのをもたてまつらしめ給ひてなん」とあるが、四月十八日には「おほせられ」たのであるか、「たてまつらしめ給」うたのであるかが、一応問題になるが、後者の方が正しいと見たい。これは古文の解釈の方法として注意したい所であるが、とにかくこの四月十八日を奉勅の日とし

たいのである。真名序には最後に「于_レ時延喜五年歲次乙丑四月十八日。臣貫之等謹序」とあって、いかにも奏上の日付のようであるが、これも奉勅の日現在で書く書式であるとみたい。日本紀略、延喜五年四月十五日の条には「今日御書所預紀貫之、撰_三進古今和歌集一部二十卷_二」とあるが、これは真名序の末尾を簡単に解釈したのであろう。そして大日本史料は日本紀略を採用したらしいが、くわしい論証としては従いがたい。

仮名序に「万えふしふにいらぬ古き歌、身づからのをもたてまつらしめ給ひて」とあるのは、編修した歌集を奉るというよりは、古歌と新歌とを奉るという意味であったと見られる。真名序には「各獻_二家集、并古来旧歌、曰_三統万葉集_二」とあって、その意味が一層顕著であり、家集とあるのからみると、個人歌集を幾通も奉り、その総括的な名称が「統万葉集」であったと考えられる。万葉集のことは枕草子に「古万葉集」とあり、菅原道真に「新撰万葉集」（菅家万葉集ともいう）があるので、万葉集という名称は普通名詞と見られ、古今集が初め「統万葉集」と称せられたとしても自然ではない。

真名序には「於_レ是重有_レ詔。部_三類所奉之歌。勅為_二二十卷_一。名曰_三古今和歌集_二」とある。これによると、延喜五年四月十八日以後、比較的早い時期に諸家の家集が奉られ、重ねて詔が下されて部類を施し、二十卷にまとめられたといふのである。しからば、家集を奉った時期、重ねて詔を下された時期、完成して奏上した時期は、それぞれいつであるかが問題になるが、初め二つは全く不明、完成奏上の時期は延喜八・九年か、延喜十三・四年かということになる。

古今集卷十九の雑体に、貫之の「ふるうたてまつりし時のもくろくの、そのながうた」というのがあって、中に、
きみをのみ　ちよにといはふ　世の人の　おもひするがの　ふじのねの　もゆるおもひも　あかずして　わかるゝ

なみだ　藤衣　おれるこゝろも　やちぐさの　云々

とある。「きみをのみちよにといはふ」は賀であり、「世の人のおもひするがの……」は恋であり、「わかるゝなみだ」は離別であり、「藤衣おれるこゝろも」は哀傷、「やちぐさの」は雑であるから、この編修だと、離別が恋と哀傷との間にあって、今の古今集と順序がちがうのである。そう思ってみると、元永本・筋切は「離別」という部類の名称が「雑別」とある。「離別」の誤写と見られないこともないが、離別歌が恋歌と哀傷との間にあったとすると、離別も露旅も哀傷も広く雑歌とされ、離別は雑の内の離別という意味で、「雑・別」とされたのではあるまいか。とにかく古今集はその成立過程において、離別歌を恋歌の次に置き、それで完成にしようとした時期のあったことが確かである。なお部類名について言えば、巻十九の「雑体」という名称は元永本・清輔本・雅経本という有力な証本になく、「旋頭歌」という名称も清輔本・雅経本になく、元永本は、「旋頭歌」の下に「風俗、雑歌」とあって、旋頭歌を雑歌の一種としてゐる趣である。いずれにしても巻十九の部類名は未決定のままであつたと見てもよく、それから考えると、巻十九・巻二十は編纂歌集としての体裁を整えるためにできたもので、各の家集を奉るといふ趣旨の強い時代には考えられなかつたのであろう。仮名序に「すべて、千うた、はたまき」とあるのは、千百余首を概数で「千うた」といったと考えるのが普通であるが、あるいは「千首」の方は初期の歌数、二十巻の方は完成時の巻数ではないかと考えられる。

さて古今集の完成奏上の時期については、所収の歌の作られた時代や官名等の記載から推定してゆくより外はない。集中で、延喜五年以後の作といふことの明らかな歌は次のごとくである。

巻十九、二〇六 七条のきさき、うせたまひにける後によみける、伊勢、おきつなみあれのみまさる……は定家の注に「延喜七年六月八日崩、卅六」とあるように、延喜五年以後といふことが明らかである。

巻十七、九元 法皇にしかはにおはしましたりける日、鶴洲にたてりといふ事をだいにてよませ給ひける、つらゆき、

あしたづのたてるかはべを……は延喜七年九月十日の大井川行幸和歌である。

卷十九、二六七 法皇にしかはにおはしましたりける日、猿山の峽にさけぶといふ事を題にてよませたまうける、みつね、わびしらにましらななきそ……同上。

卷一、六 亭子院歌合の時よめる、伊勢、みる人もなき山ざとのさくら花……は延喜十三年三月十三日の歌合をさす。

卷二、八九 亭子院歌合歌、つらゆき、さくら花ちりぬるかぜのなごりには……同上。

卷二、二二 亭子院の歌合のはるのはてのうた、みつね、けふのみと春をおもはぬ時だにも……同上。

これだけ延喜五年以後の歌があつてみると、完成は延喜五年以後ということが明らかであり、かつ、それは延喜十三年三月以後とみるのがすなおであろう。新古今集には切継ということがあつて、元久二年以後にも歌の出入があつたので、古今集の場合も奏上は延喜五年、右の歌は以後の追加と考える人がある。もし延喜五年を奏上とすれば、奉勅はそれより前ということになるが、その時期は不明というのも、初めての勅撰歌集として、おかしいから、やはり奉勅は延喜五年で、完成奏上は少し後と見たいのである。

官名等の記載として最も注意すべきものは、

卷十四、七〇 中納言源ののぼるの朝臣のあふみのすけに侍りけるとき、よみてやれりける、閑院、相坂のゆふつげとりにあらばこそ……

である。これは定家の注に「昇、延喜八年二月中納言、九年民部卿、十四年大納言」とあるように、源昇の中納言在任は延喜八年二月から延喜十四年（八月）までであり、この題詞は右の期間に書かれたことになるので、このことと、延喜十三年の歌のあることとをもって、古今集の完成奏上は延喜十三・四年と考えることができるのである。この説は昭

和八年八月の「文学」に「古今集の完成奏上の時期」として掲載し、以後機会ある毎にこの説を掲げてきたが、世の普通の出版物には、古今集を延喜五年奏上のように記しているものが多かったのである。

官名等の記載として、次に注意すべきは、左大臣である。すなわち、

卷四、三〇 朱雀院のをみなへしあはせにのみてたてまつりける、左のおほいまうちぎみ、女郎花秋のの風にうちなびき……

卷十九、二〇四 左のおほいまうちぎみ、もろこしの吉野の山にこもるとも……

とあるが、「左のおほいまうちぎみ」は左大臣で、この左大臣は時平である。時平が左大臣になったのは昌泰二年（八九九）二月であり、朱雀院の女郎花合は昌泰元年である。時平の左大臣であったのは、延喜九年四月四日没するまでであり、翌五日に正一位太政大臣を贈られている。

早稲田大学の村瀬敏夫氏は右の事実その他によって、古今集の完成奏上は、時平の存命中であり、延喜九年以前であるともし、もし時平没後ならば作者名は贈太政大臣となるはずとし、これに中納言源昇を参酌して、昇が中納言に昇任した延喜八年以後とし、結局延喜八・九年という説を、昭和三十一年十月二十八日の和歌文学会で発表し、ついでこれを「和歌文学研究」第三号（昭和三二・四・一五）に発表したのである。

延喜十三・四年説と延喜八・九年説と、そのいずれが推論が正しいか。私は自説を撤回して、延喜八・九年説に従うべきか。村瀬氏説に従うと、延喜十三年の歌は後の補入ということになる。それはよいとして、延喜九年以後の奏上であつたら、必ず左大臣を贈太政大臣と改めたであろうか。これに少しの疑問がある。というのは古今集の官名等の記載に、多少その時現在のものがあるからである。その例として次のものがある。

卷十六、八三　ほりかはのおほきおほいまうちぎみ、身まかりにける時に、ふかくさの山にをさめてける後によみける

卷七、四九　ほりかはのおほいまうちぎみの四十賀、九条の家にてしける時によめる

堀河太政大臣は昭宣公基経であるが、右大臣に任じたのは貞観十四年（八七二）八月で、四十賀は貞観十七年で、時に右大臣であったから「おほいまうちぎみ」（大臣）とし、左大臣を経ずに太政大臣になったのは元慶四年（八八二）十二月、没したのは寛平三年（八九一）正月で、時に太政大臣の現職であったから、「おほきおほいまうちぎみ」（太政大臣）としたのである。

卷十六、八五　式部卿のみこ、閑院の五のみこにすみわたりけるを……

卷十七、九〇　中務のみこの家の池に舟をつくりて、おろしはじめてあそびける日……

この二つにおいて、定家は「式部卿」に対して「敦慶親王」と注し、「中務のみこ」に対して、「敦慶、後式部卿」としている。定家の注が正しいならば、二様の官名記載があることになる。

卷九、四〇　朱雀院のならにおはしましたりける時に……

卷十七、九五　朱雀院のみかどぬのひきのたき御らんぜむとて……

朱雀院は宇多上皇のことで、「奈良におはしまし」たのは、昌泰元年十月のことであるが、上皇には昌泰二年十月御出家になった。それで古今集には法皇と申している。（九二九・九五〇・二〇七）これは官名記載ではないが、その時現在の記述があるという例にはなる。同様にして僧正遍昭と良岑宗貞との両様の作者名のうち、俗名の方には、その時現在のものがあるかもしれない。

このように、古今集にはその時現在の記述も確かにあるので、左大臣の場合も、その時現在ということがあり得る。ことに時平は昌泰二年から没するまで十一年間も左大臣であったので、左大臣としてのなじみが深く、延喜九年以後においても、官名をそのままにしておいたということもあり得る。そこで私は村瀬氏の説に対して敬意を払うが、今直ちに私の説を撤回するということとはしないで、しばらく両説とし、そのいずれに推論の妥当性が多いかは学界の判断に待ちたい。要は延喜五年奏上説が否定できればよいのであり、延喜八・九年でも、延喜十三・四年でも、それは大した意義の相違はない。

三 作 者

古今集の作者はおよそ百二十余人である。古今集目録と清輔の計算は別表第一欄と第二欄のごとくであるが、小異がある。いま定家本により、墨滅歌の采女と衣通姫とを加え、左注は認めないで計算すると、別表第三欄のごとくである。

3	2	1				
		古今集目録	男	僧	女	尼
	清輔の計算	八六		一〇	二五	一
	いまの計算	八九		一〇	二六	一
		八九		一〇	二七	一
						計
						一二二
						一二四
						一二七

僧十人は変化なく、女子も采女と衣通姫を加えると、目録の二十五人が二十七人となる。目録の男子八十六人も、左注は認めない、良岑宗貞は僧に入れるという方針で列伝を数えると八十七人になり、これに逸脱の物部吉名、墨滅歌のあやもちを加えると、八十九人となって、今の計算と一致するのである。よって名のわかる作者を百二十七人としたい。

この外に読人しらずの歌、四百三十一首（目録）ないし四百五十四首（清輔本）の作者があるわけである。

作者を時代によって大別すると、安倍仲麿のように、特別に時代の古い作者は別として、初期、中期（六歌仙時代）、後期（撰修時代）に三分することができ。初期の歌人としては、平城天皇と推定されている「ならのみかど」、弘仁十一年（八二〇）周防守になった（目録）菅野高世、承和五年（八三八）隱岐の国に流された小野篁などがある。但し高世については、いま底本にしている宗家相伝本に「延長元年歌也、追入」という注がある。

異本には珍しい作者がある。古今集目録には「有^二他本^一無^二此本^一歌等」として、広井女王（卷十六）、新田部貞範（卷十七）、多治比安江（卷十八）などの名が見える。広井女王は貞観元年十月二十三日なくなられた方で、日本紀略に催馬寮をよくされたとあるが、花山法皇本古今集に、

諒闇のとし冷泉院のさくらをみてよめる 尚侍広井女王

心なき草木といへどあはれなりことは咲かずともにかれなむ

とある。元永本古今集は卷二の「吹く風と谷の水とし」（二八）の作者を時文とし、卷四、三六の作者、敏行朝臣を致行朝臣とし（為家本は、あつゆきの朝臣）、卷五、三五の作者、紀淑望を木淑人とし、卷五、三〇の作者、紀友則を「きのともひら」とし（高野切も同様）、また卷十九に、

人のうしをつかひけるが、しにければ、そのうしのぬしのもとによみてつかはしける 源宗岳娘

わがのりし事をうしとやおもひけむ草葉にかゝる露の命を

とあって、源宗岳娘が作者になっている。

作者の記載方式は、本によって多少異なることは、九、伝本と底本の項でのべる。定家本として作者の問題になるの

は、次のごとくである。卷三の幽仙法師は幽仙律師の誤り、卷十五・八〇三は作者名、兼芸を逸している。

古今集の作者で歌の多いのは、貫之百〇二首、凡河内躬恒六十首、紀友則四十六首、素性法師三十六首、壬生忠岑三十五首、在原業平三十首、伊勢二十二首、藤原敏行十九首、小野小町十八首、清原深養父十七首、僧正遍昭十七首、藤原興風十七首などである。貫之の百〇二首は特に多く、四人の撰者友則・貫之・躬恒・忠岑の歌を合計すると二百四十三首になり、全体の二二％ということになる。

四 形態と組織

定家の貞応本は仮名序・歌・墨滅歌・真名序の順で、写本は一冊又は二冊の胡蝶装に仕立てている。嘉禄本は真名序がない。仮名序には古注があって二行細書に書き、嘉禄本・伊達家本には「安積山」の歌を余白に書き入れている。以上本文の外に定家の注が行間や作者名の下に記入され、合点や声点があり、例外的な校異もある。

俊成本は真名序・仮名序・歌の順である。墨滅歌は定家本の指示する位置にあって、卷末にまとめられていない。真名序は基俊本に従って巻頭においたのである。俊成本にも注記があるが、本文の傍に別の本文を記し、両説になっているのが特色である。俊成本も胡蝶装であるとみてよい。

雅経本は二冊で、上冊は胡蝶装、下冊は胡蝶装と袋綴との混合である。初めに仮名序があって真名序はなく、墨滅歌もない。仮名序の古注は一筆に書いている。題詞・歌・作者を多く仮名で書いたのが特色で、清輔本との校異がある。清輔本は仮名序・歌・真名序の順になっているが、真名序は清輔の新たに添えたものである。二冊の胡蝶装で、上冊の見返しに若狭守通宗の識語がある。仮名序の古注を頭脚に書き入れているのが、この本の特色である。異本の歌を書き

入れ、諸本との校異、多数の勘物などあって、紙面が複雑であるから一見して清輔本であることがわかる。

元永本は色彩模様のがう唐紙を用い、胡蝶装二冊の美事な本である。真名序はなく、假名序の古注は一筆に書き、歌は一首を二行又は三行に書いているが、散らし書きにした所もある。

延喜のころの古今集は卷子本で二十巻あったと思われる。両序は上奏されたか否か明瞭を欠くが、上奏されたとしても巻物が二巻又は一巻増加するだけであるから、その点自在であったわけである。序が添うとしても、序は数の外であるから、二十一巻又は二十二巻とはいわない。現在卷子本として伝わるのは本阿弥切・高野切・伝俊頼筆切であるが、早くから冊子も行われて、両者が平行して行われたと思う。筋切が粘葉装であるのは珍しい。

歌の分類は春・夏・秋・冬・賀・離別・羈旅・物名・恋・哀傷・雑・雑体・大歌所御歌の十三に分けているが、名称が本によって多少ちがいがい、部類の名称を一部欠くものもある。編修の過程においては離別が恋の次であったことは、成立の項で述べたごとくである。

一卷の組織は書名・巻名・部類名を掲げ、歌には題詞・作者が前行し、歌の左に注の付いたものもある。假名序はいきなり「やまとうたは」と書き出したものであり、元永本のように「古今和歌集巻第一」とあったり、伝俊頼筆切のように「古今倭歌集序」とあるのは正式でない。一卷の内の歌の排列には一定の方針があったと見られる。これについては早く契沖の古今余材抄が注意を払っており、最近では松田武夫博士がこの問題に関心を払っており、関みさを氏もこの問題にふれている。四季の部では季節の順に歌をならべ、賀の歌では「光孝天皇を中心とした関係者の歌」が一群をなしていることが、松田博士によって指摘され、雑歌上下は「上篇の基調は明るく、下篇はその主調を哀調においている」ことが、関氏によって指摘されている。右の結果として同じ主題の歌は一カ所におかれるということになるので、